そのときが今を決めた

北村弘行

❖青春のただなか

２００８年７月、京都は祇園祭を迎え、36℃を超える気温が報道されている。昨年大病を患った身には応える。

１９４５（昭和20）年、太平洋戦争でわが国は追い詰められ、３月14日に大阪は空襲により、13万戸が焼失し、４月１日アメリカ軍が、沖縄本島に上陸。６月23日沖縄守備隊全滅。戦死９万、一般国民死者10万を数えた。

１９４５年７月、函館水産専門学校で学生生活を送っていた。18歳の夏であった。

❖青函航路壊滅する

７月14日、養魚実習で苫小牧近郊、勇払郡厚真村で２カ月滞在していた農家から帰校して待機中だった。アメリカ艦載機により、函館が空襲を受けた。函館山の中腹にあった下宿からは艦載機グラマンの操縦士が見え、機関砲の掃射を受け、生きた心地がしなかった。函館湾内に停泊中の青函連絡船などがロケット攻撃を受け、沈没した船舶は９隻となり、ここに青函連絡航路は壊滅した。

❖樺太（サハリン）へ

７月上旬に樺太へ寒天原藻の分布調査に行く内報が知らされていた。７月20日に稚内に到着し、大泊へ渡る稚泊連絡船の出港日時を、桟橋駅まで確認に出かけていた。稚内の旅館で滞在が１週間ほどになった。当時稚泊（稚内～大泊）連絡船は宗谷海峡の敵潜水艦出没情報によって出港時刻が不明で足止めを受けていた。

連絡を受け、防風岸壁から樺太丸？に乗船して目的地の遠淵湖に向かった。各自救命胴衣をつけ対潜監視から昼間に航行することになり能登呂半島を左舷に見ながら亜庭湾を大泊へと向かった。８月１日に大泊入港。港でイタニグサの生態研究に努力されてきた先輩の出迎えを受け、木炭バスに乗り込み遠淵湖へ。日本の敗戦まで、あと15日であった。

遠淵湖に樺太寒天株式会社が運営管理している事業場があり、そこで宿泊しながらイタニグサ（Ahnfeltia plicata (Hudson) E.F.ries）という紅藻類の寒天原藻採取と分布を調査することになっていた。

❖遠淵湖

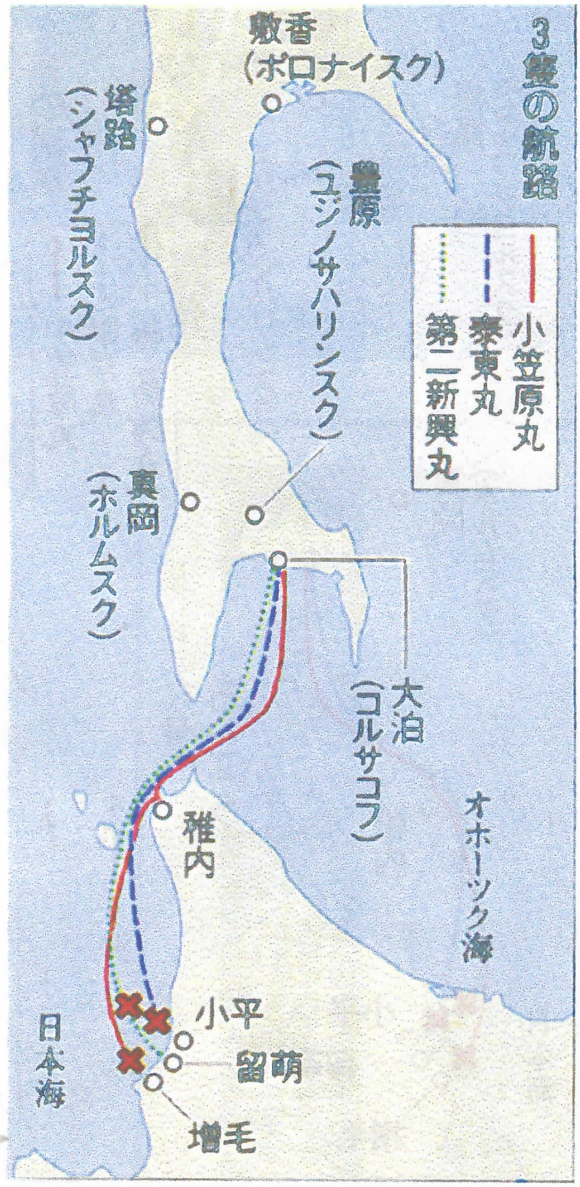
事業所宿舎は飯場そのもので一同はストーブを囲んで寝ることになる。今から思えば夏時刻で日本の標準時より１時間早く、生活は午前４時起床だから内地の午前３時に起きていた。

８月２日、寒天原藻の分布調査始まる。ここ事業所宿舎のすぐ隣が海軍千歳航空隊遠淵分遣隊基地であった。星薬専から学徒出身の大尉を隊長に、同じく学徒出身の数名の飛行士官と整備、通信などを担当する数十名の兵員が配備された小規模の基地であった。

一日一回大湊まで連絡に水上機が往復していた。隊長の好意で郵便物があれば大湊へ運んでやるといわれた。片道切符のようで心もとなかったが皆せっせと手紙を書いていた。隊長は私達に対しては寛大で、基地への出入りもかなり自由に黙認してくれていた。

日々の作業は索敵行に出撃する水上機の爆音を聞きながら、連日、八尺桁網で湖底をさらいイタニグサを採取する重労働だった。８月６・９日の原爆投下もしらず、イタニグサ採取に明け暮れていた。

８月14日、分遣隊から日本敗戦の連絡を受けた。８月15日正午に戦争終結の詔書が放送された。日本の敗戦で太平洋戦争は終了した。


3隻の航路
小笠原丸
泰東丸
第二新興丸
敷香
(ポロナイスク)
豊原
(ユジノサハリンスク)
大泊
(コルサコフ)
オホーツク海
塔路
(シャフチヨルスク)
真岡
(ホルムスク)
稚内
小平
留萌
増毛
日本海

❖そのときが今をきめた 樺太(サハリン)からの脱出

引率教授、学生15名は遠淵湖から機帆船で大泊に引き返し、市内の寒天会社で桟橋までの状況を聞いたうえ、会社から手配の荷馬車に荷物ともども乗り込んだ。手綱は級友の一人がさばくことになって会社に別れを告げた。

大泊は広い道幅の坂道が桟橋まで続いていた。途中で手綱が解けた。馬を制御する手立てがない。皆坂道でスピードが出た馬車から、転げるようにして飛び降りる。やがて街にある電柱に当たり、やっと停まった。一人が頭を打ったのか意識が戻らず、避難で大混雑の市内で医院を探すのに右往左往した。幸い軽い脳震盪と判り、再び桟橋へ。

大泊桟橋では乗船予定の泰東丸がすでに離岸している。見ると3隻が南へ進んでいる。そのしんがりが船尾に泰東丸と船名を見せていた。乗る船がない。皆に落胆の声が漏れた。

桟橋を見渡すと海防艦が1隻、ドラム缶で書類を焼却する作業を行っていた。藁にもすがる気持ちで便乗かたを要請した。約1時間後、書類の処分が終わり次第稚内へ出港とのこと。甲板の砲塔の陰にかたまっているようにと了解を得た。他の引揚者と共に海防艦で北海道の土を踏むことができた。

稚内から函館まで臨時列車に便乗し、無事に函館駅に着いたのは22日の夜であった。

❖引揚げ船の行方は

大泊桟橋で乗り遅れた泰東丸ら3隻の引揚げ船はどうなったのか。

3隻は国籍不明の潜水艦により撃沈され、死者は1708人になっていることを知ったのは2005(平成17)年8月20日付朝日新聞オピニオン欄に矢野牧夫氏の記事を見た結果である。

記事には、《殉難無念の1700人語り継ぐ施設を》として、「終戦から1週間が過ぎた1945年8月22日、北海道留萌沖で、樺太(現サハリン)から緊急避難する計5千人余りを乗せた3隻の引揚げ船が国籍不明の潜水艦に襲撃された。小笠原丸、第二新興丸、泰東丸の3船だ。(中略)明け方から午前10時頃までの間に相次いで襲われたのだ。小笠原丸と泰東丸は瞬く間に沈没、第二新興丸は大破しながらも留萌港にたどり着いたが、計約1700人もの人命が失われた。国籍不明といわれた潜水艦は、その後ソ連太平洋艦隊所属だったことが判明した」云々と。

❖物語は続く

週刊朝日(2008・5・23付)《昭和からの遺言》の記事を見ると、「当時5歳の納屋幸喜少年が母、兄、姉と敷香(シスカ)から避難し、大泊で引揚げ船小笠原丸に乗った。母親は船に弱く、乗り込んですっかり船酔いで、一家は小樽までの予定を稚内で下船した。そのまま乗船を続けていれば、留萌沖で沈んだままだ」。

北海道に引揚げてきた納屋幸喜少年は、裸一貫、稽古でたたきあげ、不世出の名横綱大鵬となるその人である。小笠原丸は大泊桟橋で乗り遅れた、泰東丸の前を航行していた船ではないか。

❖青春只中の一齣

敗戦から63年の歳月が過ぎてきた。操縦士の顔が見えたグラマン艦載機。撃沈される青函連絡船。危機も判らず樺太へ渡航。敗戦。大泊の混乱。桟橋で泰東丸に乗り遅れ。などなど。青春只中にあった半月ほどの激動がよみがえってくる。

(了)